

平成23年度

事業活動報告書



公益財団法人 吉野川紀の川源流物語

I. 法人の概要

(平成24年4月1日現在)

本来前年度の法人概要を報告すべきところを公益移行認定に伴う法人の解散・設立の手続きのため新法人の概要を示す

| | |
|------------|---|
| 法人の名称 | 公益財団法人吉野川紀の川源流物語 |
| 設立年月日 | 平成14年4月1日 平成24年4月1日名称変更し、移行したことにより設立 |
| 定款に定める目的 | この法人は、「樹と水と人の共生」を目指し、吉野川・紀の川の源流部を拠点に、その自然的価値、文化的価値を大切に、流域をはじめ都市部の人々にこれを伝え、共に考え、行動するため、体験学習・交流活動を通じて、広く啓発や環境教育に関する事業を行う。そして、これに必要な拠点施設や関連公共施設の維持管理・運営に関する事業を行い、源流域の自然環境保全活動に努める。これらの活動により、流域をはじめ都市部の人々と水源地域を結び、もってそれらの人々の公共利益に寄与することを目的とする。 |
| 定款に定める事業内容 | この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。 (1) 環境学習・体験プログラムの提供にかかわる事業 ① 「吉野川源流－水源地の森」体験学習プログラムの提供 ② 森づくり体験学習プログラムの提供 ③ 体験学習を通じた環境教育の実施及び支援 ④ 水源地域の環境保全にかかわる人材の育成 (2) 流域交流・啓発にかかわる事業 ① 水源地域の自然及び文化を介した交流行事の実施 ② 水源地域の環境保全の普及啓発のための行事等の開催、印刷物等の刊行、電子情報媒体の作成 (3) 源流域の自然や歴史の調査・研究にかかわる事業 ① 水源地域及び流域における参加型観察調査会の実施 ② 「吉野川源流－水源地の森」自然実態調査の実施 ③ 源流部における斜面崩壊地での対策実験及び経過観察の実施 (4) 拠点公共施設の管理・運営にかかわる事業 ① 展示を通じて情報発信を行う施設の管理・運営 ② 源流部での体験活動の拠点となる森とこれに附帯する施設の管理 (5) 学習教材や、啓発関連物品等の販売 (6) 他団体からの依頼にもとづいてこの法人が構築する情報や技術によって対応可能な業務の受託 (7) その他この法人の目的を達成するために必要な事業 2 前項第1号から第4号までの事業は、公益目的事業とし、奈良県内で行う。 |
| 主たる事務所 | 〒639-3553 奈良県吉野郡川上村大字迫 590 番地の2 |

| | |
|----------------|--|
| <p>役 員 等</p> | <p>評議員（五十音順）</p> <p>石井 誠一（奈良県水道局長） 井上 正崇（大阪工業大学） 上林 哲士（川上村教育委員会次長） 浦西 勉（龍谷大学教授 元奈良県教育委員会） 大西 廣長（川上村議会議長） 岡本 勝年（和歌山県企画部地域振興局地域政策課長） 霜上 民生（社団法人近畿建設協会理事長） 鈴江 利夫（橋本市上下水道部長） 田中 敏彦（奈良県地域振興部長） 東谷 八宗（川上村議会総務文教委員長） 眞野 廣（和歌山市水道局長） 森内 太（川上村地域振興課長）</p> <p>理事（五十音順）</p> <p>大谷 一二（川上村長） 栗山 忠昭（川上村副村長） 坂口 泰一（川上村水源地の村づくり課参事） 清水 啓敏（奈良県地域振興部地域政策課長） 辻谷 達雄（前 森と水の源流館館長） 西久保 智美（コミュニティライター 元奈良日日新聞記者） 橋本 裕行（奈良県立橿原考古学研究所事業計画課長） 宮口 侗迪（早稲田大学教授） 横田 岳人（龍谷大学准教授）</p> <p>監事（五十音順）</p> <p>辰巳 八郎（川上村監査委員） 中平 繁和（川上村議会監査委員）</p> |
| <p>主 な 会 議</p> | <p>（予定）</p> <p>定例理事会 6月 3月 定時評議員会 6月</p> |
| <p>職 員 状 況</p> | <p>事務局長 尾上 忠大 正規雇用職員 5人 臨時雇用職員 1人</p> |

II. 事業の状況

| 公益事業Ⅰ | 環境学習・体験プログラムの提供にかかわる事業 | | | |
|---|------------------------|-----|--------|---------------------------------|
| 吉野川・紀の川の源流及び水源地域の自然環境や文化を資源とした環境学習及び体験等のプログラム実施を通じて、環境保全や保護についてともに考え、行動するきっかけを提供する。そして流域をはじめ都市部の人々と水源地域の交流を促進し、これらの地域の環境に対する意識の向上ならびに環境保全に寄与する事業。 | | | | |
| | 時期 | 回数 | 参加数等 | 概要 |
| 水源地の森ツアー（一般公募型） | 4・7月 | 2回 | 36名 | 「水源地の森」を案内 (台風後の11月予定分は別内容に) |
| 第10回森と水のワークショップ | — | — | — | 大雨の影響により中止 |
| 団体（企業含む）研修等での利用 | 通年 | 25件 | 1,029名 | 水源地の森散策や森づくり体験など |
| 環境教育支援（学校対応） | 通年 | 72件 | 4,254名 | 小学校から大学までの見学案内及び出張源流教室 |
| 源流学の森づくり | 5・3月 | 3回 | 23名 | 一旦伐採された二次林での森林整理の作業や「源流学」実技体験 |

| 公益事業Ⅱ | 流域交流・啓発にかかわる事業 | | | |
|---|----------------|-----|------|---|
| 吉野川・紀の川流域をはじめ都市部の人々と相互に交流することによって、源流及び水源地域の自然環境や文化的価値を見出し、大切に守り育てていくことを目的とした啓発イベントや講座を実施する。そして自然環境について高い意識をもった人材育成につなげることで、これらの地域環境保全ならびに向上に寄与する。 | | | | |
| | 時期 | 回数 | 参加数等 | 概要 |
| 源流のつどい | 6・1月 | 2回 | 75 | 「ホタルの夕べ」及び「水瀑ツアー」 |
| 夏休み（館内）プログラム | 7～8月 | 16種 | 372名 | 押し花のしおりづくりほか |
| 流域連携各地へのPRキャラバン | 通年 | 11回 | 788名 | イオンモール大和郡山店ほか |
| 源流まつり（ふれあいデー） | — | — | — | 台風12号の影響により中止 |
| 「水源地の村からの提言」シンポジウム | 8月 | 1回 | 104名 | 「源流学的スローライフのすすめ」 JTB奈良支店長講演と移住推進制度活用者の体験報告など |
| 川上村環境基本計画推進業務 | 通年 | 9回 | 190名 | |

| 公益事業Ⅲ | 源流域の自然や歴史の調査・研究にかかわる事業 | | | |
|---|------------------------|----|------|-------------------------------|
| 吉野川・紀の川流域の源流部における自然的価値及び文化的価値を大切にするため、流域をはじめ都市部の人々にも参加を求めながら調査・研究を行い、その成果の発信を行うことを通じて、これらの地域の環境保全ならびに向上に寄与する。 | | | | |
| | 時期 | 回数 | 参加数等 | 概要 |
| 吉野川紀の川しらべ隊 | 4・8・3 月 | 3回 | 86名 | 参加体験型でのコケ観察、水生生物観察、野鳥観察 |
| 水源地の森自然環境調査 | 7・12月 | 4回 | 8名 | 後期区域の野鳥調査等 |
| 専門家による調査・研究 | 通年 | 9回 | 38名 | 下層植生調査、爬虫類・両生類調査 |
| 「芽吹きのかげ」プロジェクト | 3月 | 1回 | 310㎡ | 台風被害による補修 植生マット敷設（森守募金を充当） |

| 公益事業Ⅳ | 拠点公共施設の管理・運営にかかわる事業 | | | |
|--|---------------------|-----|--------------------|-----------------------------------|
| 水源地域における環境保全の啓発や環境教育を行う拠点となる施設やフィールドを一体的に維持管理及び運営を行うことで、地域環境保全ならびに向上に寄与する。 | | | | |
| | 時期 | 回数 | 参加数等 | 概要 |
| 「森と水の源流館」の管理 | 通年 | — | 利用者 11,553 名 | 日常の維持・管理、運営。定期点検、清掃、補修 企画展等の運営 |
| 「吉野川源流—水源地の森」の管理 | 通年 | 14回 | — | 散策路周辺の見回り・点検、補修 (入山者 664名) |
| 「水源地の森交流施設」の管理 | 通年 | 9回 | — | 水源地の森に付帯する休憩・管理施設の見回り・点検、補修 |

| | |
|---|---------------------|
| 収益事業Ⅰ | ミュージアムショップ事業 |
| 拠点施設において、訪問の記念となる品とともに、源流及び水源地域の支援・PR並びに自然環境の保全・啓発等に寄与する関連商品の販売を行う。 | |
| 概要 | |
| オリジナル読本・ポストカード、地域の自然、歴史・文化・伝承の書籍、環境に配慮した製品（洗剤など）、自然観察用品（ルーペなど）森の手入れで出た小枝の活用（小物やクラフトキットなど）ほかの紹介・販売 その他 | |

| | | | | |
|---|-------------|----|------|-----------------------------------|
| 収益事業Ⅱ | 受託事業 | | | |
| 他団体からの依頼にもとづいて当財団が構築する情報や技術によって対応可能な業務を受託し行う。 | | | | |
| | 時期 | 回数 | 参加数等 | 概要 |
| 和歌山市民の森づくり整備管理業務委託 | 7～12月 | — | — | 拡張1haの半分の地ごしらえを含む維持管理 |
| 和歌山市民の森づくり体験学習業務委託 | 10月 | 1 | — | 1回は警報発令により中止 もう1回も荒天につき雨天プログラム |
| 和歌山市民の森林道周辺崩土対策措置 | | | | |

公益事業Ⅰ 環境学習・体験プログラムの提供にかかわる事業

一般公募や団体の要望により企画する「水源地の森ツアー」のほか、源流地域の自然や文化にふれる体験型ツアーやこれらを取り入れた研修を受け入れました。

【水源地の森ツアー】



一般公募水源地の森ツアー 4月



環境学習支援での小学校の受け入れ 6月

【川上村エコツアー】



大学生に対するエコツアー 8月 歴史講和



11月 村有林案内

【その他学習支援】



小学校の案内 5月



地元小学校の民具使用体験 3月

【出張源流教室】（出前授業を実施）



【企業・団体による森づくり体験・視察】



エネルギー企業労働組合 6月 11月



住宅企業CSR担当による視察 11月



奈良県新採用職員研修 4月



JICA国際協力機構研修 11月

【源流学の森指導者講習】 3月



公益事業Ⅱ 流域交流・啓発にかかわる事業

源流地域の魅力を介して、都市部の人々との交流をはかる催しの開催や、各地に出かけてのPRを展開等を通じた普及啓発に取り組みました。

【源流のつどい】



源流のほたるの夕べ 6月



御船の滝氷瀑ツアー 1月

【夏休みプログラム】(7月・8月)



丸太切り体験



石の標本づくり

【PR キャラバン】



「吉野学へのいざない」かしはらナビプラザ(9月)



「吉野旨いもの、木工品展」イオンモール大和郡山店(9月)

【シンポジウム】



平成 23 年度近畿建設協会助成事業「源流学的スローライフのすすめ」(8月)

【川上村環境基本計画促進業務】



「川ばたみーていんぐ」(4月～2月)



役場公共施設研修会

公益事業Ⅲ 源流域の自然や歴史の調査・研究にかかわる事業

流域をはじめ都市部の人々の参加を得て体験型の調査を行いました。

【水源地の森調査】



下層植生調査



菌類（キノコ）調査

【吉野川紀の川しらべ隊】



紀の川市「田んぼの生き物をしらべよう」（6月）



川上村「水生生物をしらべよう」（8月）

公益事業Ⅳ 拠点公共施設の管理・運営にかかわる事業

【森と水の源流館 企画展示】



「野草・雑草押し花展」とワークショップ（4月～5月）



「奈良県のへび」（9月）



「源流の“いま”“むかし”」写真展（3月）



歳時ディスプレイ



吉野杉で作った門松＝“門杉”

パブリシティ（新聞ほか掲載記事）

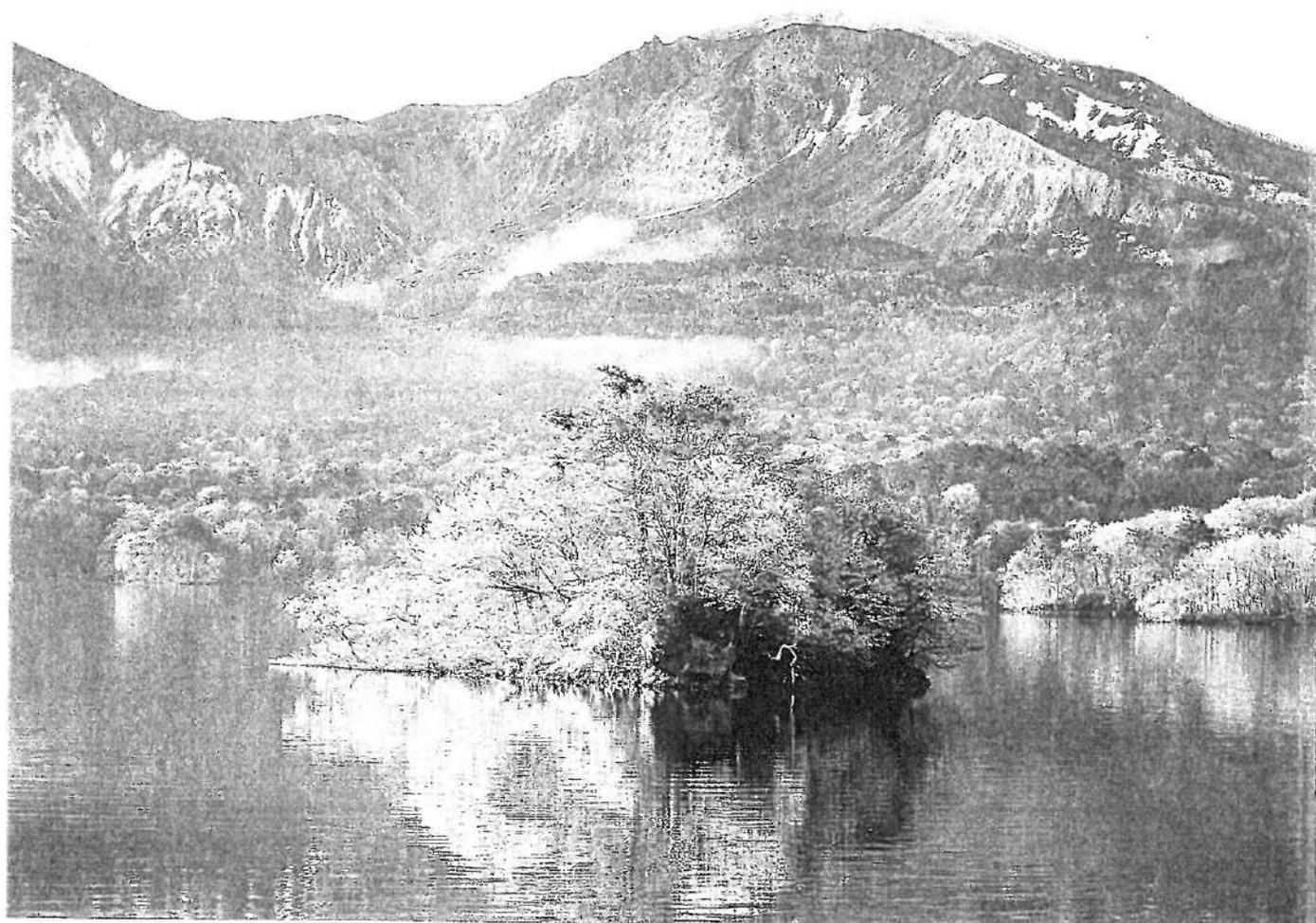
国立公園



財団法人 国立公園協会

■自然公園を元気にしよう
水辺を活かす

National Parks
MAY 2011 **693**



■自然公園を元気にしよう 水辺を活かす



「吉野川源流—水源地の森」

人が健やかに暮らすためには欠かせない水を流域に届けつづけることで、この小さな村が環境の時代のリーダーとしての役割を担っていかうとする気持がこめられたものであった。

そして、この宣言の一つ一つを具現化していくことが、村づくりであると考え、一九九九年から二〇〇二年にわたり、源流部に残る手つかずの原生林約七四〇haを購入「吉野川源流—水源地の森」(以下「水源地の森」として、保全していくこととした。ダムが造られた村が自らの資金で下流域のために、水源林保護を目的に森を買うという例は珍しいということであった。

川上村では、この「水源地の森」の保全と啓発にあわせ、先人たちが重んじてきた自然とともにあった暮らしを伝えるために二〇〇二年に「森と水の源流館」を開設した。管理運営は「財団法人吉野川紀の川源流物語」が行い、ここを拠点にさまざまな体験交流プログラムを展開している。

さまざまなか 源流体験プログラム

「水源地の森ツアー」

源流域の貴重な自然資源であり、象徴でもある「水源地の森」は、保全の観点から普段は入山制限を行っている。他地域の世界遺産認定の森林などでも多人数の進入による生態系への影響が懸念される。「水源地の森」では共生可能な許容人数やその根拠はまだ明確でないが、一旦失ってしまったら、取り返せないことは間違いないと確信し、観光とは異なる位置づけで、ゆるやかな取組みを行っている。

毎年三〜四回程度の開催日を設定し、一般参加者を募り実施する「水源地の森ツアー」のほか、小学校から訪れる子どもたちから高

校、大学、また大人の環境学習、市民グループや企業の研修の機会として、観察指導員が同行し「水源地の森」を訪ねる源流体験学習を行っている。

人工林のまっすぐ伸びる木々の間をぬけ出て原生林に進むと目に入るのは、岩に根を張りグネグネと枝を伸ばす広葉樹、積もった落葉を踏む感触、生き物との出会い、苔をしたたり、途切れなく石を打つ水しぶき、透きとおった淵の輝

き、その水を口に運んだときに参加者は声をあげる。はじめて身をおく空間に「癒された」と感想を述べる参加者も少なくない。しかしこのツアーでは、そこからさらに一歩先の気づきを提供すること



環境学習のフィールド

を目標としている。自分たちに届く水のふるさとを知り、そこを守るために、その水が少しでもきれいなまま自分に届くために、そして自分から下流域に住む人々にもきれいな水を届けられることを考えるきっかけとなるよう働きかけられている。それによって「水源地の村」の存在価値を確認し、流域からの応援を得ながら、当地域が自信をもって歩み続けることにつながりたいと考えている。

「地域体験プログラム」

当地域が誇る資源は「水源地の森」だけではない。山菜が芽吹く春に始まり、ホタルが里に舞う初夏の夕べ、秋の紅葉、滝が凍ってつくりあげる真冬の「水瀑」とい



大学生の樽丸づくり体験

紀の川源流から、水源環境保全のための流域交流の取組み

森と水の源流館「財団法人吉野川紀の川源流物語」

奈良県川上村

川上村は奈良県南部、和歌山湾へと流れ込む一級河川紀の川（奈良県内での名称は吉野川）の源流に位置する。面積は大阪市よりもひと回り広く（二六九・一六㎢）、その九五％は森林である。年間雨量四、〇〇〇㎜をこえる大台ヶ原



川上村位置図

に近いことから、この豊かな雨と温暖な気候が、吉野杉や桧の優良材を育んできた。川上村の林業の歴史は五〇〇年といわれ、吉野林業の発祥の地として栄えた。一九六五年（昭和四〇年）頃までは七、五〇〇人を超えていた村の人口は、二〇一〇年一二月末時点で、一、八〇〇人台、高齢化率は五〇％を超えた。この背景には、林業の低迷とともに、村に起きた二つの大きなダム建設がある。

一九七三年には、農林省（現・農林水産省）の「十津川・紀の川総合開発事業」に基づいた大迫ダムが完成。また一九五九年に襲来した伊勢湾台風による甚大な被害を機に建設省（現・国土交通省）の大滝ダム建設が決定。四〇年以上の時を経てダム整備事業が続いている。両ダム事業による水没、移転は約六五〇軒に及んだ。

紀の川・吉野川源流で水源地の村づくり

基幹産業の不振と急激な過疎化の中で、村は一九九四年に策定の第三次総合計画を「吉野川源流物語」と題して、源流の村が、ダムによって文字通り水がめの村になったことで、水を守る宿命を背負い、下流域のために自らその役割を果たしていこうという決意を構想に込めた。樹と水と人の共生をキャッチフレーズに個性的で魅力ある「水源地の村づくり」を進めてきた。

きれいな水を流します。
一、私たち川上は、自然と一体となった産業を育て山と水を守り、都市にはない豊かな生活を楽しみます。

一、私たち川上は、都市や平野部の人たちにも、川上の豊かな自然の価値にふれあってもらえるような仕組みづくりに励みます。

一、私たち川上は、これから育つ子どもたちが、自然の生命の躍動にすなおに感動できるような場をつくります。

一、私たち川上は、川上における自然とのつきあいが、地球環境に対する人類の働きかけのすばらしい見本になるよう努めます。

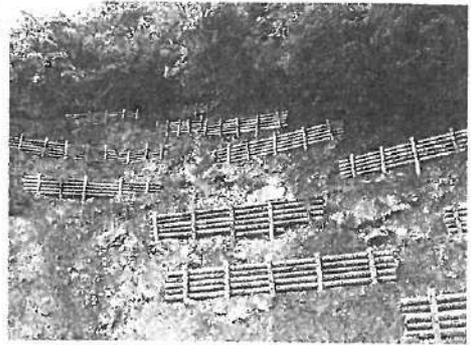
そして一九九六年には、「川上宣言」として全国に向け発信した。

《川上宣言》

一、私たち川上は、かけがえのない水がつけられる場に暮らすものとして、下流にはいつも

森林や川をはじめ、源流域の大切な資源である自然とともに生き、

■自然公園を元気にしよう 水辺を活かす



間伐材による土留め木柵「芽吹きの日」

植樹した樹木が生長するには大変厳しい環境であることから、斜面崩壊の対策として、間伐材を使った土留め柵の設置を行い、自生する樹木の根付きを助ける取り組みを行っている。また、このための募金も呼び掛けている。

四種類の森を教材に 森林環境教育

奈良県では平成一八年度より森林環境税を導入。この税収の一部が森林環境教育の体験学習や指導者養成などの推進に充てられている。「森と水の源流館」においても、県内小学校をはじめとする教育機関からの受け入れや出張プログラムへのニーズが高まった。

「水源地の村」からのメッセージとして、森林環境教育のサポートを通じて何を伝えるべきかスタッフみんなで議論をするが、難しい問題である。ただ「なぜ今、森林環境教育なのか」という問いかけへの答えは、人工林・原生林を問わず「今、森林がピンチである」ということは確かであろう。そのことを森の魅力や役割とともに伝えることにしている。

ここに来れば、四つの森を一度に見ていただくことができる。①手つかずの原生林「水源地の森」、②原生林に一度手を入れてしまった後の森、③三〇〇年〜四〇〇年前から今日まで手入れを続けてきた人工林、④手入れができなくなっている人工林。

原生林、人工林それぞれに対する人のかかわり方を考え、「森の木を伐ることは、いいこと？ 悪いこと？」という問いに対して、答えが二通りあることを一目瞭然に理解いただけるであろう。

これからの 課題と目標

先日、流域のあるところから一泊で川上村を訪れてくれた人が帰

りに際に言葉を残してくれた。

「源流には、都会（まち）が捨ててしまった文化がある。そこは、都会（まち）の人々の心のよりどころであり、日本人が捨ててはならない。ふるさとである。」
とてもうれしい言葉である。まさに「源流学」の考え方のものである。

川上村は、人と自然の関わり、その歴史と今を見渡すことができる地域であり、人の営みの尊さが同時に息づいている。地球温暖化や生物多様性への影響など、地球レベルの環境問題が顕在化する中、人と自然が共生するためのヒントがたくさん残っている場所である。

しかし、時代の変化とともに、「川上」では、以前のように林業を通して、あるいは暮らしの中で森と水の恵みを守っていくことが難しくなっているのも事実である。

今、企業・団体を中心に、都市部の人々にも参加をいただきたいながら、このかけがえのない財産を未来に引き継いでいくことができる仕組みが必要であると痛感している。

地球温暖化防止対策におけるCO₂の排出量取引や企業のCSR

活動などによって、源流域の小さな村の自然資源に目を向けてもらうことができるチャンスが来ていると考えている。実際は、自然が豊かであるということは、アクセスが容易ではなく、自然の中では危険と背中合わせであることも事実である。しかし、だからこそ守っていく必要があるということを理解いただき、ぜひ賛同をいただきたい。もちろん、われわれスタッフのモチベーションとスキルの向上にも努力を重ねていく所存である。

「川上宣言」の最後には、「地球環境に対する人類の働きかけの、すばらしい見本になるよう努めます。」とある。課題が山積する過疎地域には、アンバランスに聞こえるかもしれないが、小さな村の大きな挑戦として、これからも見守っていただけるよう願うものである。

森と水の源流館

(財団法人) 吉野川紀の川源流物語

〒六三九一三五五三

奈良県吉野郡川上村迫五九〇の二

電話 〇七四六(五二) 〇八八八

FAX 〇七四六(五二) 〇三八八

<http://www.genyu.or.jp>

った四季折々に魅せられる景色。また「生きた化石」と呼ばれる針葉樹トガサワラをはじめ、他ではなかなか出会うことができない植物や生き物。これらの自然資源はもちろん、地域固有の行事や風習、郷土料理、史実や伝説にまつわる場所や史跡など、歴史・民俗的資源。そして切り離すことができない吉野林業に関連する素材は、特に当地域が今後も発信していくべき題材であり、これらを融合し、村の人々の暮らしや営みに触れることで伝える体験プログラムを実施している。例えば、人工林の見学や間伐の体験とあわせて吉野杉を原料に樽丸という樽の部材を作る現場を訪ね、職人の話を聞く、また、割ばし工場を訪ねる。あるいは、薪割りを体験したあと、実際にカマドをまだ現役で使う旅館の厨房を訪ね、郷土料理の「茶がゆ」づくりを体験するなど、いずれも、そこで暮らしてきた村の人々が語り部となつて、伝えてくれている。

《吉野川・紀の川しらべ隊》

源流域の自然に目を向けるだけでなく、中下流域へ出かけ、その地域の人々とともに自然や歴史的資源を発見し、一本の川でつな

る「流域のたからもの」として守り育てていくためのきつかけづくりとして実施している。この活動によって水源や自然環境保全にかかわる人材のネットワークづくりを目指している。

テーマは「流域交流」と「源流学」

森と水の源流館の活動テーマを二つのキーワードで表現している。一つは「流域交流」である。流域とは、河川流域、つまり和歌山市を河口とし、海へと流れていく一本の川でつながるところの人々、また途中で取水され、県や市町村の施設を経て、水道水や農業用水として届いている奈良県内の人々、さらには、直接水が届くことはないが、何らかの意味において森や山の恩恵を享受する都市部として、京阪神地域在住の人々を対象としている。

そしてそれらの人々に訴求するテーマとして、「源流学」というキーワードを掲げている。「源流学」とは、源流を通して人と自然の役割について考え、行動し、その体験の中から一人ひとりが答えを見出していく取組みである。源

流の自然、環境、生き物の生活、風土、人や物の交流、産業、歴史、遊びなど、源流についてのさまざまなことを知り、行動していくことが「源流学」であると考えている。現代社会が失ってしまったもの、また見失ってしまったもの、また見失ってしまいたいようなものを源流地域で学ぼうというものである。

例えば、山の暮らしで培ってきた生きるための知恵や技を知ること、また、森や川での遊びの中で、子どもたちが自然の大切さを知るための環境教育も「源流学」の一つである。

《源流学の森づくり》

「水源地の森」に隣接し、かつては同じ原生林だった山が、バルブ供給のための出材で一旦皆伐され、今では二次林となっている。しかしここでは、雨による斜面崩壊を繰り返す箇所があり、流出した土砂が、源流域の溪流をどんどん埋めて浅くしている。二次林も今のところは、早く育つ樹種ばかりのうっそうとした森となっている。この森の下層植生の生育促進のために、作業歩道を整え、除伐作業



強雨による斜面地の崩壊

を行っている。作業体験だけでなく、ノコギリの目立てやカマ研ぎなどの道具の手入れの指導を受け、また昔ながらの囲炉裏や五右衛門風呂まで備えた、山小屋づくりの体験もプログラムとして実施した。そしてこの小屋を作業拠点に、火おこしや食事の用意などを交えながら、森の手入れを体験するプログラムを実施している。

《和歌山市民の森づくり》

この森の一部で「和歌山市民の森づくり」が行われている。紀の川河口部に位置する和歌山市は、源流・川上村と二〇〇三年に「水源保護に関する協定」を締結。現在二haの森の管理を当財団に委託するほか、年に二回、市民の森づくり体験会を実施している。

《芽吹きのかげプロジェクト》

ここではシカなどの食害を含め、

川上の生活や魅力紹介

檀原で
シンボ 村への移住者体験語る



村外から川上村に移住した男女らが体験を語ったシンポジウム。24日、檀原市久米町の檀原市商工経済会館

吉野川の源流を守る川上村の取り組みや暮らしを紹介するシンポジウム「水源地の村からの提言」が24日、檀原市久米町の商工経済会館で行われ、村外からの移住者が体験を報告。県内外から参加した地域づくり団体や行政の担当者、市民ら約100人が耳を傾けた。

同シンボは、財団法人が運営する川上村追の「森と水の源流館」が4年前から毎年、檀原市内で開いており、今回は「源流学的スロ

ーライフのすすめ」をテーマに実施。定住促進を図る同村の空き家バンク制度で村外から移り住んだ人たちが現在の暮らしぶりを語り、村の魅力に光を当てた。

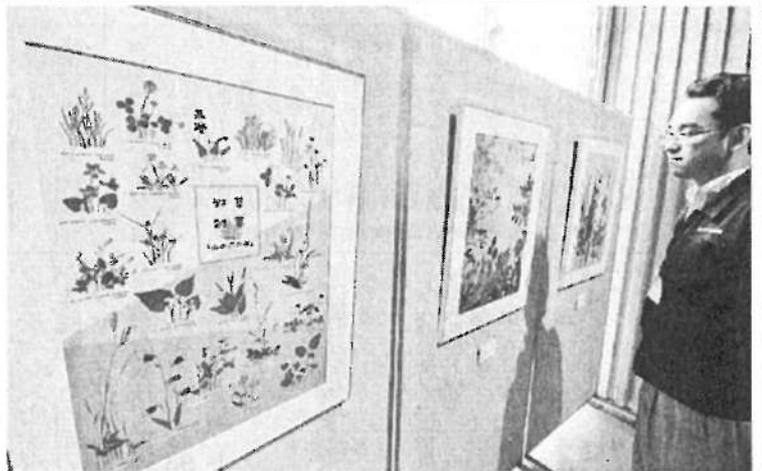
この中で、2年半前に夫の定年退職を機に王寺町から移って来た

夫婦は「気持ちはずっかり村民。湧水で沸かしたコーヒーがおいしい」と話し、東京出身の40代の女性は「自然に囲まれ、畑も作り、快適です」と笑顔を見せた。

最後に、森と水の源流館の辻谷達雄活動指導顧問が「ゆとりと癒やしのある暮らしを提案していきたく」とまとめた。

押し花の 野草並ぶ

川上・森と水の源流館



押し花が並ぶ企画展＝川上村宮の平の「森と水の源流館」

川上村宮の平の森と水の源流館で、企画展「野草・雑草押し花展」が開かれている。5月29日まで。

天理市の押し花インストラクター佐藤桂子さんの作品17点を展

示。ノイバラやノアザミ、多種のスミレなど小さな野草が、自然の中で生きているように表現されている。

同館は「自然との新たな親しみ方を、楽しんでもらえれば」と話している。

5月7日と29日には押し花づくり体験会が開かれる。両日とも午前10時と午後1時から。当日受け付け。材料費はしおり（子ども

向け）が2枚で100円、ポストカード（大人向け）が1枚で200円。

午前9時から午後5時まで。水曜定休（祝日の場合は翌日休み）。入館料は大人400円、小中学生200円。問い合わせは森と水野源流館、電話0746（152）088888。

心安らぐ 静かな美しさ

庭を覆う緑のコケは、私
たちには普通の風景。気持
ちが安らぐが「コケの庭は
日本ぐらい。静かな美しさ
にひかれる独特の美意識か
らでは。コケを歌った国歌
は世界中で『君が代』だけ
だ」。

地味なイメージが強いが
「顕微鏡で見ると細胞の並
び、模様もきれい」。コケ
は4億5千万〜5億年前
に出現、当時の体裁を残し
ている。高等植物との関
係にも不明点が多く「進
化の秘密を隠している」
と話す。

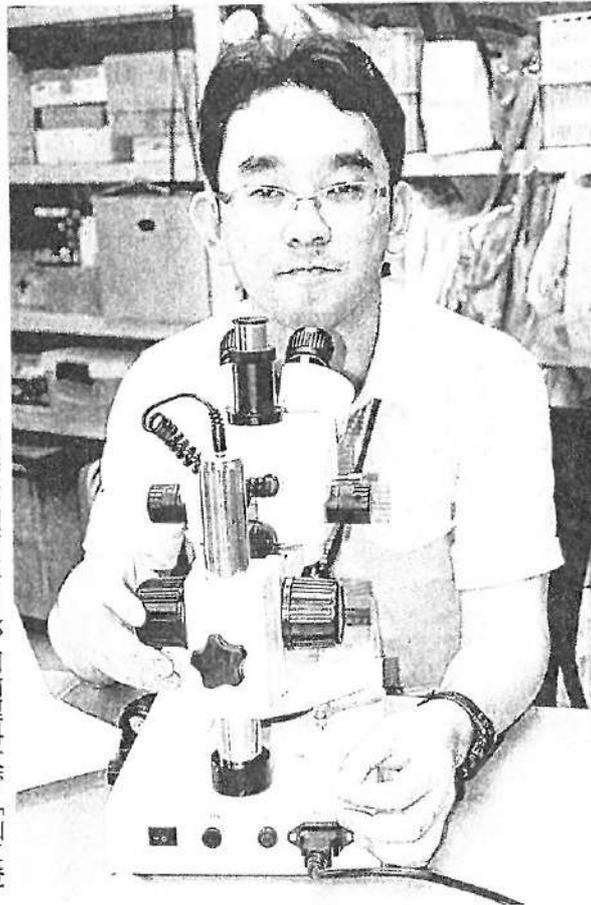
吉野川源流の川上村は
「研究にはいい所。吉野で
は200種ほど確認された
だけだが、ちょいちょいと

木村全邦さん(38)＝川上村迫

源流の村で
コケを研究

調べただけで300種見つ
000以上でないと見ら
かった」。大台ヶ原の60
0種以上は世界遺産の屋久
島並みだ。さらに「とんで
もない所」と驚いた発見も
標高500以上の場所では「
熱帯分布の種と近縁では1
味が悪くて無理」。ただ「将

来のため研究のストックが
多いのは豊かな国の証し」
とも言う。
近年「コケに癒やしを求
める若い人が増え図鑑が売
れている。米国などでも美
しいと認識されてきた」と
うれしそうに話した。
【栗栖健】



やまと 人模様

きむら・まさくに 1972年、大阪府高槻市生まれ。岡山理科大で「山に登
りたくてコケの研究にはまった」。専門はコケの分類。川上村での調査がきっか
けで05年、(財)吉野川・紀の川源流物語に就職し現在、企画調査班長。同村の
森と水の源流館(0746・52・0888)で勤務。日本蘚苔類学会員。

美しい森を次代に 林業再生を考える

第35回全国育樹祭に合わせて、水源地の森をばくむ川上村で19日「美しい森をつくる」をテーマに育林交流集会(国土緑化推進機構 県主催)が開かれた。県内外から森林づくりの活動団体や教育関係者ら約140人が参加し、講演やパネルディスカッションで林業再生を考えた。

川上で育林交流集会

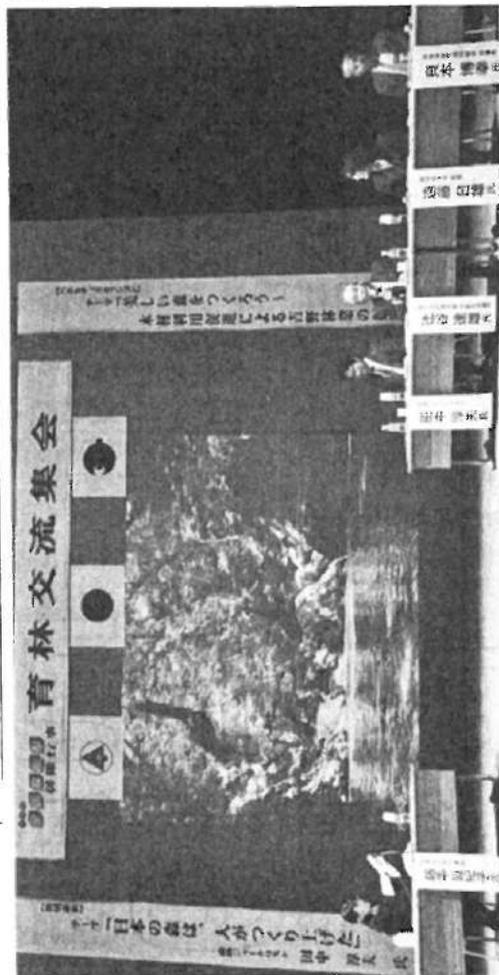
開会式典では、国土緑化推進機構の青木正徳常務理事が「多様な生物が共存できる森林を国民全体で守り育て、次世代に引き継ぐことが責務」とする佐々木毅理事長のメッセージを代読。来賓の出江俊夫林野庁研究・保全課長や大谷二二村長らが木材利用促進や林業振興への期待を述べた。

講演は、生駒市の森林ジャーナリスト田中淳夫さんが「日本の森は、人がつくり上げた」と題して語り、「日本は木材を使う時代に入ったが、木材価格が下落し山に還元されない

ことが課題だ」などと指摘した。

パネルディスカッションでは藤平真紀子奈

良女子大講師を進行役に、田中さんと辻谷達雄・森と水の源流館活動指導顧問、遠藤日雄・鹿児島大学教授貝本博幸・県銘木協同組合理事長が意見交換。木材の利用を促進する方策や今後の吉野林業振興を複層的に考えた。



(第3種郵便物認可)

パネルディスカッションなどで森づくりを考えた育林交流集会19日、川上村の川上緑舎センターやまぶきホール

榎原市畝傍町の県立榎原考古学研究所付属博物館で17日、台風12号災害による流木を使って来年の干支・辰にちなんだ龍の置物をつくる工作教室が開かれ、小中学生ら約40人が参加した。

同館で開催中の特別陳列「十二支の考古学―辰―」の関連行事として開催。講師を務めた「森と水の源流館」（川上村）の成瀬匡章さん(37)が、台風12号による豪雨で多くのスギやカシ

台風流木で龍置物 榎原 児童ら挑む

などが倒れたり、流されたりした被害状況を説明し、「置物作りを通じて豊かな森や水源の大切さを考えて」と呼びかけた。

子供たちは、長さ30〜70センチほどの流木をノコギリで切ったり、細い枝を接着剤で取り付けたりして龍の足や角をかたどった。天理市前裁町の市立前裁小6年谷口海斗君(12)は「足を付けるのが難しかったけれど、イメージ通りの龍が作れた」と満足そうだった。



流木を使って龍の置物を作る参加者たち
(県立榎原考古学研究所付属博物館で)

こまどり

○：川上村
宮の平の一森
と水の源流
館の玄関に、
村の杉やヒノ

キを使ったひな壇「源流ひな」が飾られ、来館者を迎えている＝写真。

○：同館活動指導顧問の辻谷達雄さんが約2週間かけて製作。杉やヒノキの丸太で作った3段のもので、その上には御殿が建てられ



た。間伐された樹皮や小径木などを余すところなく利用する吉野林業発祥の地らしいひな

壇となった。

○：同館は「川上村らしいこだわりの『源流ひな』を見てもらえれば」と話している。展示は4月3日まで。

水曜休館。問い合わせは森と水の源流館、電話0746(52)0888。

旅行業者ら参加のプレスツアー 台風被害から復興加速

「元気な川上」発信を

歴史や自然体感 芸術家と交流も

昨年9月の台風12号豪雨災害に負けず、元気な村をPRするため、川上村は1〜2日の2日間、プレスツアーを開催し、参加した旅行業者や情報誌の関係者ら12人に復興を宣言した。

同村迫の国道169号は豪雨による土砂崩れで寸断。迂回(うりか)路が設けられたが約15分間隔の交互通行で、村民の生活と観光の両面で不便が生じていた。土砂崩落箇所では工事が進む応急仮橋は4月初旬に完成する予定で、復興に向けて加速することが期待されている。

開会式で、栗山忠昭副村長は「災害に負けず元気な村を訴えた

い。ぜひ発信してください」とあいさつ。村はこれから復興がスタートすることを宣言した。

参加者は、1日目は「匠の聚(たくみのむら)」でアトリエを構えて暮らしている芸術家と交流。6月下旬に試験たん水が完了する予定の大滝タムのえん堤を見学した。

2日目は「森と水の源流館」で村の歴史や自然、林業について学

んだ後、樹齢300年の人工美林や国重要無形民俗文化財の「吉野

の樽(たる)丸製作技術」を見て回った。意見交換会で、入之波温泉山鳩湯の中村雅仁さんは「いまだに営業しているのかと問い合わせがある」と現状を説明。湯盛温泉ホテル杉の湯の久保信幸支配人は「復旧工事が終

わったら、多くの観光客が戻ってきてくれることを願っている」と訴えた。

心が温かかった」など」と話していた。



芸術家(左)と交流する報道関係者11日、川上村東川の「匠の聚」

* 迫の風景写真 昔と今比べる

川上

川上村迫の自然
観察施設「森と水

の源流館」で、村内の大迫
ダムなどが建設される以前
と現在の風景を対比した写
真展「源流の「いま」「む
かし」が開かれている。
4月29日まで。

大迫、大滝両ダムの建設
によって大きく様変わりし
た村の姿を知ってもらおう
と同館が企画。村内の風景
や年中行事を長年撮り続け
ている同村の写真クラブ
「猿侯」などが写真30枚を
提供した。

現在と昔の写真を見比
べられるように2枚1組で
展示。大迫ダムの建設で水

没する前の「入之波集落」
や、南朝の再興をかけて
戦い18歳の若さで非業の死
を遂げた自天皇の遺徳をし
のぶ約50年前の「朝拝式」
の様子などを紹介してい
る。

同展を担当した同館職員

成瀬匡章さん(38)は「写真
を比較しながら時代の移り
変わりを知ってもらえれ
ば」と話している。
入館無料。午前9時〜午
後5時。水曜休館。問い合
わせは同館(0746・52
・0888)。



川上村の昔と今の風景を写した写真
が並ぶ会場(森と水の源流館で)